

チベット密教における ラブネー儀礼について

高松 宏 寶

(クンチョック・シタル)

1. はじめに

ラブネー儀礼 (Skt. Pratiṣṭhā-vidhi /Tib. rab gnas cho ga 善住儀礼) は密教において重要な儀礼であり、密教実践には欠かせない儀礼の一つである。アバヤーカラグプタによれば、灌頂儀礼、曼荼羅儀礼、ラブネー儀礼、護摩儀礼が四大儀礼と言える。このような理由から、筆者は「現代密教の伝統の創造」の宗教儀礼のテーマに関連して、チベット密教におけるラブネー儀礼について検討し、この儀礼の流れについて簡単にまとめ、紹介したい。

歴史的には、釈尊が大涅槃に入られた後、礼拝供養の対象が必要と感じられるようになったため、仏舎利を安置する仏塔が作られるようになった。仏塔は信者たちが功德を積むためのものとして、アショーカ王などにより多く作られた。紀元2世紀ごろからは釈尊の姿をあらゆる仏像が作られ始めたと言われている。そこから、それぞれの国・地域の寺院で仏像や仏画が生まれることになったのは当然である。それぞれの時代において、ラブネー儀礼が行われてきた。仏像製作者や仏画製作者によって作られただけでは宗教的役割としては十分ではない。一般仏教や密教の儀礼による加持と、ラブネー儀礼による神聖化・聖別が不可欠である。これらの儀礼実践によって信者の信仰と功德積集の対象となり、礼拝や供養、帰依の対象となると考えられてきた。このような儀礼はどの地域でもどの時代でも実践されてきた。日本で言うならば、開眼供養や寺院や仏塔の落慶式もラブネー儀礼の一つである。仏教以外のヒンドゥー

チベット密教におけるラブネー儀礼について

教などの宗教でも同様の聖別儀礼の実践があることは知られている。

2-1. 資料について

インド仏教におけるラブネー儀礼に関する論文は森雅秀博士をはじめいくつかある。一方、チベット仏教におけるラブネー儀礼については、海外ではトゥッチ (Giuseppe Tucci) の論文が知られている。また、ヤエル・バンター博士 (Yael Bentor) による論文は、インド・ネパールのチベット仏教僧院での調査に基づいた詳細な内容を紹介するとともに、ティジャン・リンポチェ (ティジャン・ロサン・イエシェ・テンジン・ギヤツォ Khri-byang blos-bzang ye-shes bstan-'dzin rgya-mtsho (1901-1981)) の著作を英訳で紹介している。

日本では、チベットにおけるラブネー儀礼の紹介はほとんど見られない。そこで、筆者はこの機会に紹介したいと考えている。なお、以下の引用の和訳は大意であり、厳密な翻訳ではないことをお断りしたい。

仏教の典籍には数多くラブネー儀礼が存在するが、ラブネー儀礼だけを説いている経典は『プラティシュター・タントラ (Skt. *Pratiṣṭhā Tantra*, Tib. *Rab gnas rgyud* ラブネー・ギユ Toh486)』のみである。『サンヴァローダヤ・タントラ (*Samvarodaya Tantra*)』や『ヘーヴァジュラ・タントラ (*Hevajra Tantra*)』『カーラチャクラ・タントラ (*Kalachakra Tantra*)』などの他のタントラではラブネー儀礼に一章が当てられ、説かれている。2世紀以降、インドの多くの聖者・学僧たちがこの儀礼についての論書を残しており、アバヤーカラグプタ (Abhayākaragupta 11-12世紀) は『ヴァジュラーヴァリー (*Vajrāvalī*)』でラブネー儀礼について詳しく説いている。ナーガールジュナ、アーナンダガルバ、クリシュナチャリヤ、シャーントラクシタ、アティーシャなどの著作もある。なお、インド仏教では瑜伽タントラと無上瑜伽タントラそれぞれに基づいたラブネー儀礼が説かれている。

チベットで最初のラブネー儀礼は、8世紀のサムイエ寺の落慶であり、数日にわたる儀礼が行われた。アティーシャをはじめとするカダム派や、

サキヤ派には顕教のラブネー儀礼もあり、ダライ・ラマ5世の摂政であったデシ・サンギェー・ギャツォは仏塔のための儀軌を執筆しており、Bentorが1992に紹介している⁽¹⁾。

チベット学僧によるラブネー儀礼に関する著作も多く、ジェツン・タクパギャルツェン (rje-btsun Gags-pa rgyal-mtshan (1147-1216))、サキヤパンディタ (Sa skya paṇḍita kun-dga' rgyal-mtshan (1182-1251))、プトウン (Bu-ston rin-chen grub (1290-1364))、パンチェン・ラマ1世 (ロサン・チューキ・ギャルツェン Pan-chen lama I, Blo-zang chos-kyi rgyal-mthan (1570-1662)) などの著作がある。サキヤパンディタ、ジェツン・タクパギャルツェン、プトウンの著作は、瑜伽タントラのラブネー儀礼に関する実践の解説である。

パンチェン・ラマ1世の著作 '*Rab-tu gnas-pa'i cho-ga lag-len-du dril-ba dge-legs rgya-mtsho'i char-bebs'* は『ヴァジュラーヴァリー』を主な根拠としており、後のゲルク派の儀礼の重要な根拠となっている。

今回、筆者はパンチェン・ラマ1世の上記の著作とツォンカパ (Tsong kha pa (1357-1419)) の弟子ドウルジン・タクパギャルツェン ('dul-'dzin Gags-pa rgyal-mtshan (1374-1434)) によるツォンカパの講義録を基にして、この儀礼の流れを解説していきたい。

2-2. チベットでのラブネー儀礼 (Rab gnas cho ga) の伝統

パンチェン・ラマ1世などは、インド・チベットの多くの論書、特に『ラブネー・ギユ』と『ヴァジュラーヴァリー』に基づいて儀礼を5つの科目にわけて説明している。(1) ラブネー儀礼の必要性とその功德 (2) 儀礼をおこなう阿闍梨の資格 (3) 儀礼をおこなう時期と場所 (4) どのような対象に対して儀礼をおこなうか (5) 儀礼次第の実践の流れである。

(1) ラブネー儀礼の必要性とその功德

『ヴァジュラパンジャラ (Skt. *Vajrapañjara Tantra*, Tib. *dorje gur* ドルジエクル Toh419)』に

チベット密教におけるラブネー儀礼について

常に仏陀を普く住させる（善住させる）べきである。それ（ラブネー儀礼）が完了した刹那に仏陀が普く住し、最勝となる。〔その結果として、〕転輪王の自在を得ることに疑いはない⁽²⁾。

と説いている。また、『ラブネー・ギュ』に

でき上がった仏像に加持せずに、長くそのままにしておくならば、そこに不吉祥を生じて、供養の対象とはならない⁽³⁾。

と説かれている。パンチェン・ラマ1世は

非常に信心深く行った、その功德が増大するように、ラブネーの論書を言説として（世俗のレベルとして）書いたのである。必ずラブネーすべき伝統である⁽⁴⁾。

と述べている。

(2) 儀礼をおこなう阿闍梨の資格

阿闍梨は10の資格を持っている必要があると説かれている。10の資格とは、密教行者であり、成就法に巧みであり、護摩や灌頂などの真実に精通していることなどの十の真実である⁽⁵⁾。

(3) 儀礼をおこなう時期と場所

一般にラブネーに適した期間は1年のうち6か月であり、それらの月のうちの7日間である。春の第一月と第二月と第三月、夏の第一月と第二月、冬の第一月である。日にちとしては15日・8日・13日・14日などと説かれている。また、星宿の第14宿や水曜・木曜・金曜の時期におこなうべきだとも説かれている。一方で、適した時期を限定しないという説もあるが、これは経験豊富で法力のある阿闍梨であれば時期を選ぶ必要がないという意味であろう⁽⁶⁾。

なお、現代のチベット仏教僧院の密教専門学堂では、信者の求めに応じたり、仏塔の完成時期に合わせる必要などから1年を通じて何度もラブネー儀礼が行われている。チベットの伝統では、他宗派の高僧が寺院などを来訪する際に、敬意としてラブネー儀礼をお願いすることがある。

(4) どのような対象に対して儀礼をおこなうか

仏の身口意の象徴として、仏像、仏塔、寺院、タンカ（仏画）、經典

などの典籍、数珠、金剛杵と金剛鈴などの仏具、池や溜池、庭園などを対象に儀礼をおこなうと『サンヴァローダヤ・タントラ』に説かれている。

(5) 儀礼次第の実践の流れ

実際の儀礼次第は、準備行、本行、結行の3つに分けられる。また、チベット仏教僧院では2～3日間あるいは1日、場合によっては5分ほどでできるラプネー儀礼も行われている。長さや詳しさによって、広次第、中次第、略次第に区別される。地域を代表する寺院や仏像が新造された場合などの重要性、あるいは施主の財力などに応じて、次第が選ばれることもある。

3. 儀礼の次第

A. 準備行

本行に備えて、ラプネー儀礼の物質的な準備と除魔をおこなう。本行でも同じことをおこなうことが多い。

A-1 三昧耶薩埵として生起する（我生起 bdag bskyed）

まず阿闍梨は自身を三昧耶薩埵として生起する。阿闍梨自身がふだんから成就法を修している金剛怖畏（ヤマータカ）などの本尊となるのである。阿闍梨の本尊や儀礼全体のタントラによって本尊は異なる。なお、チベット仏教僧院では阿闍梨を導師として30～100人以上の僧侶が集団でラプネーを行うことが多い。インドの伝統では水による沐浴はヒンドゥー教などでよくおこなわれる修法であり、ここでも重視されている。

A-2 沐浴の壇を作る（khrus stegs）

沐浴の壇は四角い台であり、沐浴の曼荼羅とも言う。灌頂儀礼などに不可欠なものである。この曼荼羅に多くの瓶あるいは二つの瓶（勝利瓶と羯磨瓶）を置く。その外側の八葉蓮華の上、すなわち壇の四方と四維

チベット密教におけるラブネー儀礼について

に、それぞれ、3つの甘いもの（白砂糖、黒砂糖、蜂蜜）、ヨーグルト、3つの果実、穀物、善い香りの香水としてサフラン水、米、薬草、宝が入った8つの沐浴の瓶を置く。それらの前に、成就材として五甘露、胡麻油、樹皮、五牛浄（牛糞、牛尿、牛乳、ヨーグルト、ギー）、バターと混ぜた香、キュルラ（ミロバラン）の粉末、ウコンなどをクムニエ（マッサージ）のように塗る。そして、これらの成就材を木製の器か銅器に入れ、沐浴の瓶それぞれの間あるいは前に置く。沐浴と灌頂の二つの曼荼羅において勝利瓶と羯磨瓶に曼荼羅の尊格と羯磨の尊格を生起し、瓶生起と同様のやり方で成就する⁽⁷⁾。

沐浴の壇の作り方については『ヴァジュラーヴァリー』に詳しく説明されている。

om svabhāva-śuddhāḥ sarva-dharmāḥ svabhāva-śuddho 'ham
om śūnyatā-jñāna-vajra-svabhāvātmako 'ham

によって空として浄化する。

次に、

bhruṃ字から生じた木製あるいは銅製の宝の器の中の成就材などを浄化すべきものの上に置く。瓶の中に月輪が生じ、その中心にhūṃ字があり、hūṃ字の周りを念誦すべき真言が囲む。そこから光が放たれて、ラマ・本尊・仏菩薩・ダーカ・ダーキニー・護法尊たちに呼びかけて、お招きして、真言蔓にとけこむ。そこから甘露が流れて、成就材が加持された⁽⁸⁾。

と観想し、空の状態のままから生起する。

om āḥ hūṃを100回となえ、供養の真言を21回、縁起心髓の真言（法身偈）を21回となえる。これにより沐浴の瓶と成就材が加持され、成就された。

なお、縁起心髓の真言は以下の通りである。

Om ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgato hy avadat. teṣāṃ ca
yo nirodha evaṃ vādī mahāśramaṇaḥ svāhā

〔漢訳〕 諸法從縁生 如來說是因 是法從縁滅 是大沙門説
〔チベット語からの和訳〕 諸法は因から生じる。それらの因を如來は説かれた。因における滅〔もまた〕。大沙門はこのように説かれた。

A-3 華の成就

華は欠かせない供物である。チベットの伝統では華に代えて米が使われることが多い。

前方生起した瓶の浄水によって洗った鏡の上に白檀、サフランなどによって五智如來の種字を書き、その中心に hūm 字と縁起心髓の真言の文字が立ち、輝いている。そこからの光によって有と寂靜（輪廻と涅槃）の功德一切と、勝者と菩薩の加持一切が招かれて、真言蔓（縁起心髓の真言それぞれの文字）と華に溶け込んで、闕伽水によって華が数多くなり、浄化された⁹⁾。

と観想する。

A-4 祈願 (gsol 'debs)

阿闍梨と行の阿闍梨（僧侶）は立って、華を手にして、釈尊の功德を念じながら、以下をと念える。

世尊、如來、応供（阿羅漢）、正等覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊〔であるあなたよ〕。因果について完全に理解され、一切法を知るお方、そのような世尊よ、私は〔あなたに〕普く住して（善住して）いただくように祈願します¹⁰⁾。

そのときのラプネーの尊格に華と線香を差し上げて、樂器で奏樂し、釈尊の真言をと念える。

om namo bhagavate śākyamunaye tathāgatāya arhate
saṃyaksambuddhaye tadyathā om muni muni mahāmuni

チベット密教におけるラブネー儀礼について

śākyamuniye svāhā

さらにラブネーの尊格の真言をと念える。最後に

oṃ vajrasattva hūṃ

をと念える。

A-5 発菩提心

一切衆生のために慈愛と菩提心をおこすことが基礎である。以下の通りとなえる。

素晴らしく、無量で、不可思議である世尊に礼拝し、帰依いたします。これらの方々すべてよ、私をお気にかけてください。私が一切衆生のために三宝の拠り所についてラブネー儀礼することによって、その力によって一切衆生に息（生命力）を与え、輪廻の束縛から解放します。……

閻魔の太陽を灰のように粉々にします。

無知の暗闇を取り除きます。

業（カルマ）の河を逆流させ、輪廻の海を乾かし、
正法の灯明を光り輝かせ、菩提の道を示します⁽¹⁾。

となえる。

A-6 拠り所を生じる

仏塔などをはじめとする拠り所のうち、典籍（経典）については、以下の通りである。

拠り所である典籍を鏡に映し、その映像に対して瓶の閻伽水によって浄化し、śūnyatāの真言によって、無所縁の空として浄化する。

空の状態のままからあらゆる典籍が蓮華座上の月輪座の上のhrīḥ字によって荘厳され完成したところから、蓮華と金剛鈴を持つ一面二臂の無量光（阿弥陀）が生じ、同じ姿の母尊パンドラーによって抱擁されている。

と観想する。

また、仏塔、寺院、仏像については、拠り所である仏塔などを瓶の闍伽水によって浄化し、sūnyatāの真言によって、無所縁の空として浄化する。

空の状態のままからあらゆる仏塔などが蓮華座上の月輪座の上のbhrum字によって荘厳され完成したところから、法輪と金剛鈴を持つ一面二臂の大日が生じ、同じ姿の母尊仏眼母によって抱擁されている⁽¹²⁾。

と観想する。

ちなみに、曼荼羅とそれぞれのお言葉やお身体を金剛として観想するやり方や、ラプネーの尊格を持金剛として観想する方法もある。ここで、必要ならば、護摩を修法する。

A-7 曼荼羅入壇

一般の成就法と同様に、阿闍梨は灌頂を受けるために曼荼羅に入壇する必要がある。

曼荼羅に華を投げたと観想し、目隠しを取り、曼荼羅に入壇する。

A-8 拠り所である仏像（ラプネーの尊格）の安置と四水の供養

以前に述べたように、沐浴の曼荼羅の中央に尊像などの拠り所を安置する。尊像などが傷むのを避ける場合は、拠り所を鏡に映して、映像に対して供養する。

四水（闍伽水、洗足水、洗口水、洒水）のうち、まず闍伽水の供養については、阿闍梨は金剛杵と金剛鈴を持ち、

清らかで美しい、密教の優れた闍伽水を私の信心によって供養するので、受け取って、私に恩を施してください。見守ってください。

om sarva tathāgata argham pratīccha pūja megha samudra
sphaṛaṇa samaya āh hūm

ととなえて供養する。同様に、洗足水、洗口水、洒水を供養する⁽¹³⁾。

チベット密教におけるラプネー儀礼について

A-9 忿怒尊の招来とお払い

ラプネー儀礼をおこなうことを邪魔する障害をなくすために、忿怒尊（明王）をお招きし、供養し、お払いすることは必ずおこなわれる。

忿怒尊への供養を加持し、阿闍梨の胸の hūṃ 字から光が放たれ、羯磨瓶の水を浄化する。śūnyatā の真言によって、無所縁の空として浄化する。空のままの状態から、闍伽水、洗足水、華、香、灯明、塗香、飲食、奏樂の八供養が生じる。後期密教によれば、供養材の本質は大樂と空性の本質であると考えられている。供養の真言と印相によって供養する。

胸の hūṃ 字から光が放たれ、忿怒尊をお招きする。

A-10 忿怒尊へのバリ（トルマ）供養とゲクトル（除魔）

以下の真言をとなくて、バリ（トルマ）供養をささげる

oṃ śumbha niśumbha hūṃ gr̥ṇa gr̥ṇa hūṃ gr̥ṇāpaya hūṃ
ānaya ho bhagavan vajra hūṃ phaṭ

トルマ供養を抛り所から外に出す⁽¹⁴⁾。

次に、グクル（安息香）に火をつけて燃やし、その香りで魔を追い払う。さらに、白芥子粒を四方に投げて放ち、奏樂して、魔を追い払う。

A-11 六処に触れて加持する（ニエレク Upasr̥śya）

曼荼羅の主尊の真言をとなくて、胸に香水、頭に華、前方に供養をささげ、灯明を回しながら、軍荼利明王の真言、

oṃ vajrāmṛtakuṇḍali hana hana hūṃ phaṭ

を7回となくて、バターと白い線香を燃やして、浄化行をおこなう。

阿闍梨は左手で浄水を持ち、右手の親指と薬指で水を取り、仏像などの抛り所または鏡に映した映像の口、鼻、目、耳、手、へそ、頭に触れて、ニエレクをおこなう⁽¹⁵⁾。

A-12a 通常の沐浴

繰り返しになるが、水を使って浄化する沐浴の儀式は欠かせない次第

である。チベット仏教僧院ではこの次第に時間をかけて修法する。釈尊から自分の師匠に至るまでの流儀のラマたちのお名前をお呼びして、修法の場にお招きし、加持を願う。強い信心とともに、心をこめておこなわれる。

阿闍梨は沐浴をささげることを宣言し、成就材をささげるために法座にすわる。行の阿闍梨（僧侶）たちは立って2列に並び、肩にタケツブ（肩を覆う布）をかけて、奏楽したのち、瓶と成就材を持ち、着席する。P. (84) の図1の通り、行の阿闍梨たちはそれぞれ9つの成就材と8つの瓶を持ち、五甘露を持つ。

阿闍梨は以下の通りとなえて、沐浴をささげる。僧侶は立って、美しい声明をおこなう。

世尊、如来、応供（阿羅漢）、正等覚、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊〔であるあなたよ〕。因果について完全に理解され、一切法を知るお方、そのような世尊よ、私は〔あなたに〕普く住して（善住して）いただくように祈願します。すべての道具がそろっている沐浴をささげます。山のごとくに美しい優れた功德の飾りを持つもの、供養の拠り所に、この宝によって、私が沐浴をささげます⁽¹⁶⁾。

〔典籍〕無明を取り除く太陽、有の病を取り除く薬である宝のごとき正法にささげます。

〔仏塔〕法身の本質を持つ、優れた功德のお姿である宝のごときこの仏塔にささげます。

〔本尊〕劫末の事物を破壊し、閻魔の炎のお姿を持ち、救世者の慈悲の力を持つお方にささげます。

〔ラマ〕優れたものに満たされた、幸運なるお方、正法という甘露の美しいお姿である吉祥なるラマのお身体にささげます。

〔仏像〕教化すべき衆生たちに対して、多くの化身によっ

チベット密教におけるラブネー儀礼について

て尊格の姿で〔現れる〕慈悲に満ちあふれたお方、常に利益と幸せを与える、優れた抑制するお方にささげます。

〔寺院など〕仏陀のお姿の住するところと、弟子の僧伽の住するところと、寺院と、その他の場所に私は沐浴をささげます⁽¹⁷⁾。

クリシュナチャリヤはこの次第を「本格的沐浴」と呼んでいるが、チベットの伝統では「宣言」あるいは「告知」である。実際には、通常と最勝の2種類の沐浴が、密教行事として時間をかけて、大切に行われている。

ドゥルワ草の刷毛（はけ）で掃いた鏡と灌いだ水を受ける鉢を置き、鏡に映した映像に対して沐浴をおこなうのが通常である。

続いて、五甘露、五牛浄、五香、キュルラの粉末などを器の中に準備し、

清らかで無垢なあなたに、浄化力のある善い五つのものをよく混ぜ合わせて、お塗りします。

ととなえ、完全に浄化するために、

Om Hūm Trām Hrīḥ Āḥ⁽¹⁸⁾

ととなえて、仏像または映像をドゥルワ草の刷毛で掃きながら、

om sarva tathāgata kāya viśodhanaye svāhā/

と何度も繰り返してとなえる。

私たちは清らかであり、シミひとつないが、奉仕の意味でこの新鮮なヨーグルト水によって諸々の如来のお身体を洗い、沐浴をささげます。

不壊の金剛のお身体には痛みはなく、老いもないが、世間の尊敬のあり方として香りのよい香水を塗る奉仕をいたします⁽¹⁹⁾。

ととなえる。

五甘露に続いて、同様に、1. 甘いもの3つ、2. ヨーグルト、b. 胡麻油、c. 樹皮、d. 五牛浄、3. 3つの果実、4. 穀物、5. サフラン水、

e. バターを混ぜた香、 f. キュルラの粉末、 g. 練香、 6. 米、 7. 薬草、
8. 宝、 h. 胡麻油、 i. ウコンの粉末の順に沐浴をささげる⁽²⁰⁾。

A-12b 最勝の沐浴

次に灌頂によって浄化する最勝の沐浴をおこなう。

諸々の供養を加持し、諸々の灌頂の尊格たちをお招きし、自分自身を
主尊の姿として明らかに観想し、その胸の hūṃ 字から光を放ち、如来と
仏母、菩薩と菩薩女、忿怒尊と忿怒女尊のすべての集まりを虚空にお招
きし、以下の通りとなえる。

oṃ sarva tathāgata arghaṃ pādyam puṣpe dhūpe āloke gandhe
naividya śabda āḥ hūṃ⁽²¹⁾

この真言によって八供養をささげる。

「持金剛が釈尊に衆生救済のために功德の源である灌頂を
授けられた。それと同じように、ここでも授けてください」
と祈願したことによって、如来たちが灌頂を授ける意思を
お持ちになり、仏眼母などの四仏母たちが白い瓶によって
灌頂を授け、色金剛女たちが供養し、ダーカたちが吉祥の
ことばを述べ、ダーキニーたちが金剛の歌を歌い、八門の
方々がお払いし、主尊が灌頂を授ける意思を持ち、四仏母
が宝瓶の甘露を弟子や仏像などの頭頂に灌いで灌頂を授け
て、浄化した⁽²²⁾。

と観想する。

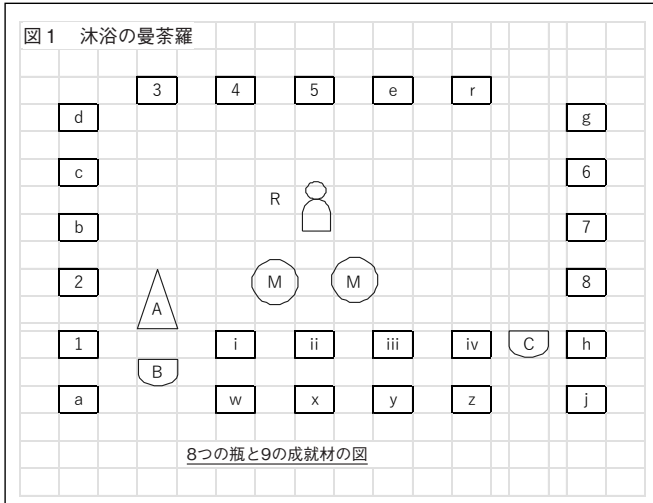
次第のほとんどが弟子灌頂と同じである。ただし、弟子灌頂では下に
向けて授けるが、ラプネー儀礼ではラプネーの尊格に灌頂をささげるの
で、上に向けて差し上げるといふ違いがある。

なお、広次第では五智如来の称讃の偈頌をとこなえておこなう。

吉祥のことば（五智如来の称讃）

吉祥な者よ、一切衆生の心に住するすべての本性である最
勝の部族の王であり、衆生を残らず生起させるこの大楽。

チベット密教におけるラブネー儀礼について



8つの沐浴の瓶	成就材	無垢の供養材	最勝の沐浴の成就材	その他※2
1. 3つの甘いもの ※1	a. 五甘露	i. サフラン水	w. 沐浴の抹香	R. 抛り所 (ラブネーの尊格)
2. ヨーグルト	b. (胡麻)油	ii. 華	x. 香油	M. 鏡2つ
3. 3つの果実	c. 樹皮	iii. 闍伽水	y. 五香の粉末	A. 護法尊へのトルマ
4. 穀物	d. 五牛淨	iv. 灯明	z. 練香	B. 三処を浄化する水
5. サフラン水	e. バターと混ぜた香			C. バターと混ぜた香
6. 米	f. キュルラの粉末			
7. 薬草	g. サフランの粉末			
8. 宝	h. (胡麻)油			
	j. ウコンの粉末			

※白砂糖、黒砂糖、蜂蜜

※2その他は儀軌には記載がない。寺院の儀礼による。

『ヴァジュラーヴァリー』に基づくBentor(1996)p81の作図を和訳した

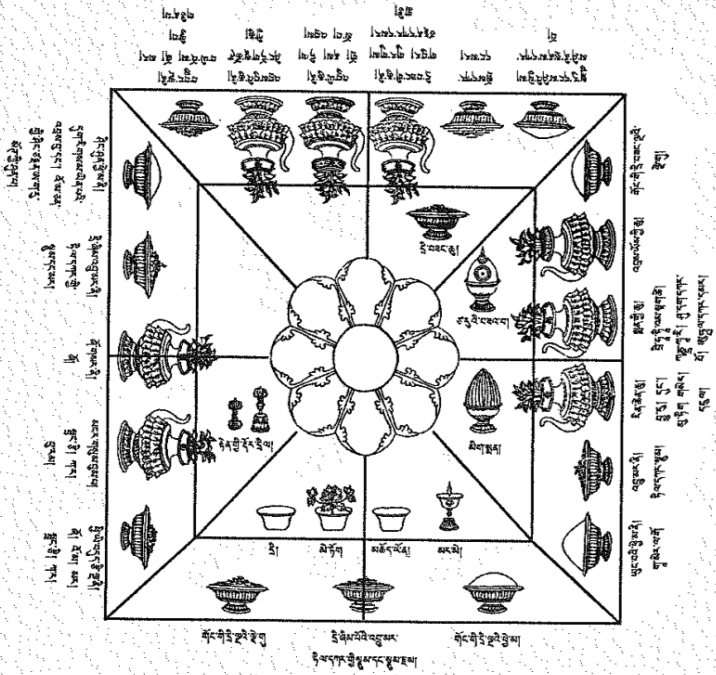


図2 Gaden Jangtse Library (2008) P80

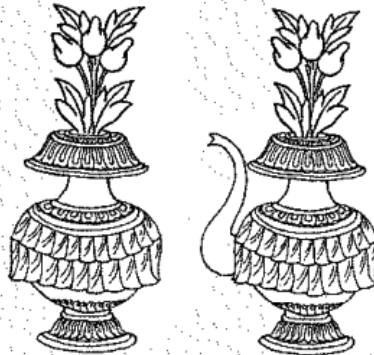


図3 左：勝利の瓶 右：羯磨の瓶 Gaden Jangtse Library (2008) P78

チベット密教におけるラブネー儀礼について

その吉祥によって、今回あなたに最勝の灌頂を授ける。
吉祥な者よ、すべての金剛の部族を伴い、怒りに支配された一切衆生を完全に浄化する救世者阿闍梨という名前を持つお方によって、その吉祥によって今日あなたに最勝の灌頂を授ける⁽²³⁾。

などと、阿闍梨が吉祥のことはを歌いながら、灌頂を授ける。

次に、沐浴場を生起するには、

沐浴の浴室は、非常に良い香りがしており、水晶の床は明らかで光っている。光り輝く美しい宝の柱があり、真珠によって光り輝く天蓋が飾られている。

ととなえ、

om sarva tathāgata kāya viśodhanaye svāhā

釈尊がお生まれになったとき、神々が甘露の雨を降らせて沐浴をささげたごとくに、私もここで沐浴をささげます。

om vajrasattva hūm hūm svāhā

ととなえる。

お顔とお身体を拭いて、衣服をささげ、飾りを差し上げて、吉祥の祈願をする。

以上で沐浴によって浄化が完了し、準備行が完了した。

B. 本行

阿闍梨は翌日、早朝に起き、正しく袈裟をつけ、我生起と前方生起を準備行と同じようにおこなう。前日の準備行で次第を把握しているので、その上で、供養とバリ（トルマ）供養などを新しく盛大に準備する。祈願と発菩提心の偈頌を準備行と同様に読経する。抛り所を生起することも同様におこない、儀礼を始める。

B-1 祈願と発菩提心

準備行と同様に、祈願と発菩提心をおこなうが、詳しくおこないたいければ、以下のように観想する。

ラブネーの尊格たちの頭頂のom字から生じた白い月輪の中心にom字、のどの赤いah字から生じた八葉の赤い蓮華の中心にah字、胸のhūm字から生じた青い五鈷杵の中心にhūm字。

ととなえる。

阿闍梨は右手に線香、左手に金剛鈴を持ち、以下の通りとなえる。

衆生を残らず指導し、魔軍の力を残らず破壊する尊格よ、諸法のすべてを真実のままにご覧になり、諸尊と眷属とともにこちらにいらしてください。

世尊よ、〔あなたは〕無数なる劫において衆生への慈愛を持ち、慈悲を修習し、広大な祈願を円満された。あなたこそが衆生利益を果たそうと考えておられる。

こちらにいらしてください。極めて美しく作られたこの尊像にいらしてください。ここにお姿とともに衆生のために善住なさってください。病気のない健康と長寿と財産と勝れたものすべてを私たちに与えてください。

そして、

本尊の胸のhūm字から光が放たれて、ラブネーの尊格たちの拠り所へ智薩埵と一切仏を招き、前方の虚空にいらっしゃった⁽²⁴⁾。

と観想し、しばらく三昧に入る。

B-2 智薩埵の招来と供養

智薩埵をお招きし、供養し、智薩埵と三昧耶薩埵が不二になる。阿闍梨の胸から光が放たれて、如来と仏母、菩薩と菩薩女、忿怒尊と忿怒母尊すべてが前方に招かれ、以前と同様に供養し、一切如来によって灌頂

チベット密教におけるラブネー儀礼について

を授けてもらう。

B-3 灌頂授与

準備行でおこなったのと同様に灌頂を授ける。

「灌頂を授けてください」とお願いすると、仏眼母などの母尊たちが虚空に現れて、勝利幡などをラブネーの尊格の上にかかげて、歌や舞い、奏樂を供養し、サフランなどの華を雨のように降らせ、甘露の満ちた白い瓶を少し傾けて灌頂を授ける。色金剛女などが吉祥の歌を歌い、吉祥のことばを述べる。忿怒尊たちが四方四維にいらっしゃり、魔を追い払った。

と観想し、次のようになえる。

釈尊がお生まれになったとき、神々が甘露の雨を降らせて沐浴をささげたごとくに、私もここで沐浴をささげます。

om sarva tathāgata abhiṣekate samaya śrīye hūm⁽²⁵⁾

ととなえて、灌頂を授けて、煩惱と障害をなくしたと観想する。

B-4 供養と称讃

以下のようにとなえて、四水の供養をささげる。

世尊が慈悲によってこちらにいらしてくださったことは素晴らしい。私たちは福德を保つ有縁の者。私からの水の供養を受け取って、私をお気にかけてください。私の願いを聞き入れてください。

om vajra gagana samaya śrīye hūm

次に、

慈悲によって私たちのために

と3回となえ、

尊格たちはお喜びになり、許しを与えてくださり、諸尊が三昧耶薩埵と不二になった。

と観想する。続いて華、七供養、奏樂の供養もおこない、称讃する。

B-5 鏡を示す

以下のようにとなえて、鏡に金剛の映像を生起する。

諸法は映像のごとくである。a字から生じた鏡は明らかで清らかで汚れがなく、取らえることも述べることもできない。

om vajrasattva āḥ⁽²⁶⁾

尊像を傷つけないために鏡の映像を用いるのであるが、映像には空の考えとしても仏教の深い意味がある。

B-6 開眼作法

金のスプーンによって、銀器の中から香りの善い香水とバターと蜂蜜を混ぜた目薬を取り、以下のようにとなえる。

眼の王が、世間の暗闇を取り除くように。諸仏があなたの無知の暗闇を取りのぞく。

一切智の眼は過失を離れているが、尊敬によって取り除く。虚空の辺に至るまで、衆生が仏の智慧の眼を得るように。

om cakṣu cakṣu samanta cakṣu viśodhane svāhā

これにより開眼される。同様に、耳、鼻、歯なども開く。また、釈尊が出家した際に必要とされたもの（剃髪のためのカミソリなど）を良い縁起としてささげることもある⁽²⁷⁾。

B-7 お姿を変える

ラプネーの拠り所（仏像など）の胸に金剛杵で触れて、

Om Hūṃ Trāṃ Hrīḥ Āḥ

ととなえ、続いて

この金剛は偉大なる金剛である。一切仏が加持された。この三昧耶を越えたなら、諸部族はたちまち破壊される。

チベット密教におけるラブネー儀礼について

om yamāntaka hūṃ phat/ om āḥ hūṃ

ととなえる。

典籍は無量光父母尊から、仏塔や寺院は曼荼羅の主尊あるいは毘盧遮那（大日）の父母尊から、仏塔などが完成し、毘盧遮那父母尊が現れて、それこそが智薩埵の自性を持つ仏塔などとなった⁽²⁸⁾。

と理解し、観想する。

以上で本行が完了した。本行は準備行とほぼ同じ流れでおこなわれる。

C. 結行

ラブネー儀礼によって神格化されたラブネーの尊格には智薩埵が溶け込んだので、生きた存在となった。そのため、ラブネーの尊格にさまざまな供養をささげる。永くあり続けていただくためには、衆生からの供養と仏からの加持が必要だからである。また、ラブネーの尊格を国民のために働く王になぞらえて、一般社会で王に財産などの善いものをささげることと似たものだと考えられている。

C-1 座をささげる（王座に着かせる）

王の即位の際に宮殿と25の財産がささげられるように、所依曼荼羅と25の材（五甘露、五香、五薬草、五宝、五牛淨）を差し上げる。

これはインドの王の即位式のようなものである。

C-2 四水の供養、内供養

四水（闍伽水、洗足水、洗口水、洒水）を供養する。

次に、曼荼羅に対して、阿闍梨はふだんから修法している成就法によって供養し、内供養をして、真言を印相とともにとなえ、七供養と奏楽の供養をして、以下のようにとなえる。

om sarva tathāgata guru buddha bodhisattva sapaṃvāra om āḥ

hūṃ svāhā⁽²⁹⁾

C-3 称讚（五智如来の称讚）

金剛、偉大なる菩提の智慧、金剛の界、大賢者、三金剛、三曼荼羅、秘密の声明である阿闍に礼拝いたします。

偉大なる清浄、金剛たる寂靜、大歡喜、光明の自性、最勝なる者の中の最勝な方、教主、金剛である毘盧遮那（大日）に礼拝いたします。

王であり、普く甚深なお方、虚空のごとき金剛、汚れなく、本来から清浄であり、無垢な金剛のお身体の宝生に礼拝いたします。

無量なる金剛、偉大なる王、無分別の虚空、金剛を持つ方、執着を超えたことを得た金剛なるお言葉の無量光（阿弥陀）に礼拝いたします。

円満なる仏、すべての希望を円満された方、清らかで本質から生じた金剛薩埵である不空成就に礼拝いたします。

とラマと仏菩薩に礼拝し、称讚する⁽³⁰⁾。

C-4 曼荼羅供養

大地を香で浄めて華を散じ、須弥山と四洲を日月で莊嚴したこれ（曼荼羅）を、仏国土と所縁してささげます。衆生が普く浄土を得ますように。

ととなえて、曼荼羅供養をする。

C-5 八吉祥の供養、五妙欲の供養、転輪王の七宝の供養

以下のようにとなえて、八吉祥（吉祥紐、法輪、蓮華、勝幢、宝傘、宝瓶、右巻きの白い法螺貝、二匹の金魚）を供養する。

以前の如来たちが吉祥紐（吉祥なる結び目）たるユンドゥン（途切れることのない万字）を善のためにお持ちであっ

チベット密教におけるラプネー儀礼について

たように、私が吉祥紐をささげます。

さらに、沐浴、衣と袈裟、飾りを供養する。

次に、五妙欲の色として宝、声として奏楽、香として線香、味として飲食、触として良い布をささげる。

続いて、転輪王の七宝である輪宝、宝珠、明妃、大臣、象、馬、将軍を供養する。

転輪王の七宝を一切仏菩薩に心から作り出して、ささげます。

衆生たちが無尽なる宝を用いることができますように。

oṃ mahā sattva ratna puja megha āḥ hūṃ svāhā

C-6 五葉草、五つの穀物、五宝、五香、五種子（心髄）の供養

それぞれについて称讃の偈頌と真言をとなえて供養する。

C-7 長寿（常に善住すること）を願う

以下の偈頌をとなえる。

十方の一切仏菩薩よ、私を気にかけてください。虚空と等しい衆生界がある限り、無住涅槃に至るまで、涅槃に入らずに善住なさってください。特に身口意の拠り所において〔善住なさってください。〕地水火風の害が起きて破壊されるまで、衆生のために無量なる事業をおこなって善住なさってください。

劫末に火と水と風によって破壊されるまで、一切衆生の利益のために、世尊よ、常に善住なさってください⁽³¹⁾。

と7回となえて、華を散じて、金剛鈴をならし、ヤマーンタカなどの本尊の真言をとなえる。

この偈頌はラプネー儀礼の核心を表しており、略次第においても必ずとなえられる。

C-8 許しを請う

通常の成就法と同様に、儀礼の過不足について許しを請い、百字真言を唱える。忿怒尊に守護を命じ、廻向と吉祥のことはとなえる。

以上、多くの段階を踏んで、ラブネー儀礼を完了した。

製作された仏像などは永く残るべきであるので、このラブネー儀礼は重要である。8世紀におこなわれたラブネー儀礼によってサムイェ寺は今日もあり続けている。日本にも長い歴史のあるお寺が多くあるが、それもまたラブネー儀礼のおかげであろう。

4. まとめ

以上のように、この儀礼は、密教の伝統に基づいて多くの次第を踏んでおこなわれるものであり、代表的な密教儀礼である。浄化、沐浴、曼荼羅供養、灌頂、護摩などの儀礼によって、密教の成就法としても完成されている。Mori (1998) によれば、『ヴァジュラーヴァリー』には62科目があると分析できる⁽³²⁾。

仏像製作者などが造った物質的なものを永い年月に生かし続けるための儀礼である。また、仏塔や仏像などを仏教の修行実践の対象として、仏教徒の宗教的な拠り所として、それに相応しいものにする儀礼である。

チベット仏教僧院では時間とお金と能力を費やしてラブネー儀礼をおこなっているが、経験豊富な阿闍梨が儀礼をおこなうことが多い。

阿闍梨が無所縁の空の瞑想をして、四つの生起を観想したうえで、三昧耶薩埵と智薩埵が一体となり不二となる。対象の尊格が完成したので、物理的な拠り所となる。仏塔などに溶け込む。もう一度、智薩埵に呼び掛けて、溶け込ませ、輪廻が終わるまで、供養・礼拝・功德積集の対象と変容させる。

ラブネーの核心は、①阿闍梨自身が三昧耶薩埵となり、智薩埵に呼び掛けて、一体となる。②六処などを加持する。③造られた仏像などに溶け込ませることである。これにより、ほんとうの仏や經典として扱うこ

チベット密教におけるラプネー儀礼について

とができるようになり、祈願・供養・礼拝・功德積集の対象や、観想の対象となるので、重要な密教実践儀礼なのである。

今回は、チベットのパンチェン・ラマ1世などの著作に基づいて、できるだけ簡明に説明したつもりであるが、チベット密教の開眼作法であるラプネー儀礼について、読者の参考になれば幸いである。

参考文献：Bibliography

- Rab gnas rgyud: *Rab tu gnas pa mdor bsdus pa'i rgyud*; Toh.486.
- Samvarodaya tantra: *Dpal bde mchog 'byung ba zhes ba'i rgyud kyi rgyal po; Lha rnam kyi rab tu gnas pa'I rim par phye ba* (Ch.22); Toh. 373.
- Hevajra Tantra: *Kye'I rdo rje zhes bya ba rgyud kyi rgyal po; (Rab gnas kyi le'u)*, (Ch.II); Toh.379
- Kalacakra tantra: *dPal dus kyi 'khor lo'i rab tu gnas pa'I cho ga*; Toh. 1392
- Nag po pa: *Rab gnas pa'i cho ga'i tshul*; Toh.1257. 1284, 1822
- Kun dga sNying po: *sPyan dbye pa'i cho ga (pratistha vidhi)*; Toh.2521, 2522, 2523
- Vajravali tantra: *Dkyil 'khor gyi cho ga rdo rje phreng ba zhes bya*; Toh.3140.
- Pan chen Lama 1: *Rab tu gnas pa'I cho ga lak len du dril dGe legs rgya mtsho'I char 'bebs; Blo bzang chos kyi rgyal mtshan*; (The collected Works) New Delhi 1973, Vol.4
- 'Dul 'dzin Grags pa: *Rab tu gnas pa'I zin bris*; by 'dul 'dzin grags pa rgyal mtshan, The Collected Works of Tsong kha pa); Vol 13. Delhi, 1979.
- Khri Chang Rinpoche: *Rab tu gnas pa'I cho ga dge legs rgya mtsho'i char 'bebs dpal ldan smad rgyud pa'I phyags bzhes ltar mdzad rgyu nag 'gros su bkod pa*; Blo bzang ye shes bstan 'dzin rgya mtsho (1901-1981); Collected Works (Delhi, 1978; Vol.2, pp.439-494.
- Bentor (1992): *Sutra-style Consecration in Tibet and its Importance for Understanding the Historical Development of the Indo-Tibetan Consecration Ritual for Stupas and Images*; Yael Bentor, TIBETAN STUDIES; Vol.1, Naritasan Shinshoji, 1992.
- Bentor (1996): *Consecration of Images and Stupas in Indo-Tibetan Tantric Buddhism*; Yael Bentor; E.J.Brill, Leiden, 1996
- Bentor (1995): *On the symbolism of the Mirror in Indo-Tibetan Consecration Rituals*; Yael Bentor Dr.; 1995
- Tucci (1980): *Consecration of the Tankas*; G.Tucci; Tibetan Painted Scrolls; Rinsen Book, Kyoto, 1980.
- Mori (1996): 「インド密教におけるプラティシュターの構造」『インド学仏教研究』

44(2), 1996

Mori (1994): 「インド密教におけるバリ儀礼」『高野山大学文学研究所紀代』8:174-204.

Mori (1998): 「密教儀礼の成立に関する一考察—アビシェーカとプラティシユター—」『インド密教の形成と展開』法蔵館pp.305-328

Gonda 1966: *Ancient Indian Kingship from the Religious point of View*; B Gonda J, Leiden, E.J.Brill, 1966.

註：

- (1) The Blue Annal; Moitlal Banarasedass, (1976), Delhi, pp.102-107. Bendor (1996), P.63.
- (2) rab tu sangs rgyas rab tu gnas/ zin pa de la ma thag pa ru/ rab tu gnas pa mchog tu 'gyur/ 'khor los bsgyur ba'i rgyal po yi/ dbang phug thob par the tshom med// Nga, bl6; Panchen Lama 1.
- (3) Gang du sku gzug rdzogs pa la/ byin ma brlabs par ring gnas na/ de la bkra mi shis 'byung zhing/ ji srid mchod pa der mi 'os//: *Rab gnas rgyud*. Toh.486; Pp. 292.5-6: Cf. Bendor (1996), p.21
- (4) Nga.2bl2-3; *Pan chen Lama 1*.
- (5) Nga.2bl3; Panchen Lama 1. 十の如実について
'kyil 'khor dang ni ting nge 'dzin mchog/ phyag rgya stangs stabs gdan dang ni/ bzlas brjod sbyin sregs de bzhin mcod/ las kyi sbor ba nyer bsdu ba//; 'dul 'dzin grags pa; p.567.
インド・チベット真言密教の研究、密教学術振興会、1978, N.Takada, p.245.
- (6) Spyir rab gnas bya rung ba'i dus/ zla ba drug/ gza' bzhi/ skar ma bcu bzhi/ tshes grangs bdun rnam la rung te/ ji skad du: dyid zla rab 'am/ dpyid zla 'bring/ dgun dang dpyid kyi tha chung ngam/ dbyar ra(b) de bzhin dbyar 'bring bo//; p.567; 'dul 'dzin grags pa; p.Nga 4bl2-a1; Panchen Lama 1.
- (7) Pan chen Lama 1; Nga.4a2-5. Cf.Bendor(1996); pp.109-110.
- (8) ibdi.: Nga.4bl5-5a11.
- (9) ibdi.: Nga.5al5-6.
- (10) gang 'di bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag pa rdzogs pa'i sangs rgyas rig pa dang zhabs su ldan pa 'jigs brten mkhyen pa skyes bu 'dul ba'i kha lo sgyur ba bla na med pa lha dang mi rnam kyi ston pa sangs rgyas bcom ldan 'das te/ rgyu dang 'bras bu'I dgos pa/ phun sum tshogs pa dang ldan pa/ chos thams cad thugs su chud pa'i …(gsol 'debs)”; ibdi.;Nga.bl1-3. Cf. Moti (1995).
P.99 の脚註：No.56。

- (11) ibdi.; (sems bkyed); Ngo tshar chen po grangs med cing bsam gyis mi khyab pa dang ldan pa'i Sangs rgyas bcom ldan 'das thams cad la bdag phyags 'tshal zhing skyabs su mchi'o// de dag thams cad bdag la dgongs su gsol/ bdag gis sems cad thams cad kyi don du dkon mchog gsum gyi rten rab tu gnas par bgyis bas ……………
las kyi chu bo bzlog par bgyi'o/ srid pa'i/ rgya mtsho bskam par bgyi'o/ chos kyi sgron me sbar bar bgyi'i/ byang chub kyi lam bstan par bgyi'o//; Nga; 6a6-6b15. 'Dul 'dzin grags pa; P.584.111-585.1.
- (12) (**brten bskyed pa**); 'Dul 'dzin grags pa; p.571.17-14; Cf. Panchen Lama 1; Nga.7a3-7b11.
- (13) Panchen Lama 1;Nga.7b5-8a1. (**gdan la rten bzhag – chu bzhi bul**)
- (14) ibdi.; Nga.9b13-6.
- (15) ibdi.; Nga.8a1-3
- (16) ibdi.; Nga.10a13-5.
- (17) ibdi.; Nga.10a15-b11.
- (18) Bentor (1996); p. 173
- (19) Panchen Lama 1; Nga.11b12-12a4.
- (20) ibdi.; Nga.11b5-12a3.
- (21) ibdi.; Nga.13a-b14. (**dbang bskur ba**)
- (22) ibdi.; Nga.13b14-14a4.
- (23) 'dul 'dzin grags pa; p.587.
- (24) Panchen Lama 1.; Nga.22a6-b5.
- (25) ibdi.; Nga.a1316-b1314
- (26) Bentor (1995), pp57-71
- (27) Ji ltar mig mkhan rgyal po yis/ 'jig rten rab rib bsal ba ltar/ rgyal ba rnam kyis khyod kyi ni/ mi shes pa yi rab rib bsal/ ; ibdi.; Nga.a233-b1. Cf. *Bentor* (1996); p.37.
- (28) 'dul 'dzin grags pa; P.589
- (29) Panchen Lama1.; Nga.23a1-3.
- (30) mi bskyod rdo rje ye shes che/ rdo rje dbyings mi khas pa che/ rdo rje gsum mchog dkyil 'khor gsum/ gsang ba'I ba'I dbyangs la phyag tshal lo/ rnam par snang mdzad dag pa che/ rdo rje zhi ba dga' ba che/…rdo rje sems par phyag 'tshal//; ibdi.; Nga.23a3-23b1.
- (31) phyogs bcu na bzhugs pa'I sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad bdag la dgongs su gsol/ ji srid nam mkha'I mtha' dang mnyam pa'I sems can gyi khams rnam mi gnas pa'I mya ngan las 'das pa'I sa la ma bzhag gi bar de srid du/ mya ngan las mi 'da' bar brtan par bzhugs so gsol// bye brag tuang sku gsung thugs kyi rten 'di rnam la

sa dang chu dang……brtan par bzhugs su gsol// zhes lan gsum brjod/; 'dul 'dzin
grags pa, p.600.

(32) Mori (1998): 『インド密教の形成と展開』法蔵館、pp.307-309

Key word; チベットのPratiṣṭhā、密教儀礼、チベットの宗教儀礼

Title(English) **Consecration Rituals in the Tibetan Tantric Buddhism.**